

Title	ソシユールの異言研究序論：読解にともなう幾つかの困難について
Sub Title	Etude saussurienne sur la glossolalie : retour sur quelques difficultés de lecture
Author	小野, 文(Ono, Aya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.40 (2008.) ,p.213- 228
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20081220-0213

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソシュールの異言研究序論

——読解にとまなう幾つかの困難について

小 野 文

もし残りのことが正しいと分かれば、当然のことながら私は困難なところ全てを重点的に研究するでしょう。また特にもし私が東洋語のいくつかを知っていれば、全ての語を確実に12の語根に分けることができるのと思います。しかし私は自分が夢の中でさまよっていることも分かっております。そして“ミルクの入った壺”の寓話を忘れてはならないことも。——ソシュール、アドルフ・ピクテ宛ての手紙¹⁾

はじめに

近年のソシュール学の発展を担っているのが、様々なソシュール原資料の掘り起こしと出版、そして生成過程研究にあるのは事実である。これまでジュネーヴに行かなければ見ることのできなかつた手稿・メモ書きなどの未公開資料が、2000年以降次々と『カイエ・フェルディナン・ド・ソシュール』等を中心に発表されている。また2002年ガリマル社から『Écrits de linguistique générale』が出版されたのは記憶に新しい。ソシュールは特別な言語学者であり、これからも読まれ続ける思想家であるとの認識を、多くの人文研究者が深めたのではなかろうか。しかしその一方で、すでに発表されているのにも拘わらず、あまり注目を浴びていない資料群があるのも確かである²⁾。

そのようなカテゴリーにあてはまる、一束の書簡がある。ソシュールがジュネーヴ大

1) CFS, 32, 1978, p. 101.

2) 2008年春に、『インドから火星へ』と題して霊媒エレヌ・スミスを物語る映画がフランスで公開されている。この映画をきっかけとして、フルルノワの著作『インドから火星へ』が新たな読者を獲得することは間違いない。

学の同僚、心理学教授テオドール・フルルノワに宛てたもので、1896年から1901年の日付を持つ、10通の手紙である³⁾。フルルノワがソシュールに宛てたであろう返信は、ソシュールの側には見あたらない。しかしフルルノワが1900年に上梓する『インドから火星へ：異言を伴う夢遊症の研究』という刺激的なタイトルの著作から、この書簡体の起こりとあらましはほぼ明かだ。フルルノワは1892年頃、共感覚に関する研究調査の際にソシュールと親しくなっていたが、数年後、1894年頃に霊媒師エレヌ・スミス嬢を中心とした交霊会に招かれ、それをきっかけとして若い霊媒嬢の言動を心理学的に考察しようとする。スミス嬢は異言(glossolalie)を話す霊媒で、フルルノワの注意を特に引いたのは、彼女の話す「火星語」と「サンスクリット」であった。ソシュールはまず、この「サンスクリット」を検証しうる専門家としてフルルノワに助言を求められ、続いて「火星語」に関してもフルルノワの収集した資料を分析することになるのである。ソシュール＝フルルノワ関連資料は、このように「異言研究」を中心にしている。

我々がこれから取り組もうとしているフルルノワ関連資料とは具体的に何を指すのか、ここで明確に定義しておいた方がよいが、実際にはこの作業は困難を極める。狭い意味で捉えれば、それはテオドール・フルルノワとフェルディナン・ド・ソシュールの交流を示す資料体である。ソシュールがフルルノワに提出している共感覚についてのアンケート(T. Flournoy, 1893)、1896年から1901年までの書簡(O. Flournoy, 1986)、またその書簡を一部引用し、エレヌ・スミス嬢の心霊実験を心理学的に考察しているフルルノワの著作『インドから火星へ』(T. Flournoy, 1900)がその中に含まれる。しかしフルルノワとソシュールの交流は、個人対個人の交流にはとどまらない性格を持っている。広く捉えれば、それは心理学・精神医学と言語学との交点を作り為しているからである⁴⁾。言語学との関連では、当時のサンスクリット学の重鎮だったヴィクトール・アンリの『火星のことは』(Henry, 1901)が、『インドから火星へ』を一次資料として扱っている。このフルルノワの著作は、翻訳が出たばかりか、1909年にすでに第3版の在庫がない、とフルルノワ自身によって記されている⁵⁾ほどで、一般大衆にも各学界にも広く読まれ反響を呼んでいる。後述するが、その背景には1890年代に高まりをみせる火星への関心がある。さ

3) テオドールの孫、精神分析医オリヴィエ・フルルノワが1986年に出版している。Cf. O. Flournoy, 1986.

4) そして同時にフルルノワ家とソシュール家の交点をも作り出している。ソシュールの息子レイモン・ド・ソシュールは、フルルノワの娘と結婚することになる。

5) O. Flournoy, 1986, p. 169.

らに『インドから火星へ』と同年にフロイトが『夢判断』（1900）を出版し、精神分析の幕開けとしたことを思い出すなら、フルルノワ資料体にはエピステモロジックな考察が欠かせないということになる。フルルノワもまた「無意識」に近い概念を提出し、意識とは別にはたらく器官の解明にあたっているからである⁶⁾。

ソシュール研究において、フルルノワ関連資料が言及されてこなかった訳ではない。しかしこの資料体が仔細な読み込みを拒むような仕草を見せるのも事実である。我々はこの資料体に深く入り込む前に、この抵抗が何に由来するのかを見ておきたい。ソシュールがフルルノワと交流を深めた頃は、一般に「ソシュールの沈黙」と呼ばれる時期であるが、この時期のソシュールを概観したあと、フルルノワ宛て書簡とこの沈黙との関係を検討する。次にエレーヌと学者たちの間に存在した「転移」「逆転移」の現象が、ソシュールたちに何を見せているのかを問うてみる。最後にソシュールの感じた「無意識」の問題圏への抵抗と、ソシュール研究の示す抵抗を重ねてみたい。

世紀末のソシュール

ソシュールは1891年にジュネーヴに帰郷し、同じ貴族階級のマリー・フェッシュと挙式、ジュネーヴ大学に職を得て働きはじめる。これからほぼ10年間の間に、彼の「一般言語学」の主な骨格が築かれたということは、幾つもの証言や資料によって確かめられている。しかしその作業は、外からは見えないところでひっそりと続けられた。ジュネーヴ帰郷後、ソシュールは論文の出版を進めず、私的なノートの上に思索を語るようになるのである。一般に「ソシュールの沈黙」と呼ばれる時期が始まるのは、この頃である。バンヴェニストはこの時期を次のように形容している。

この時期のソシュールを語る人びとがこれまでもすでに注目し——かつ遺憾ともした——一つの事実があります。やがて彼の仕事振りが鈍って来るのです。いくつかの雑誌論文だけ、それも年を追って間遠くなり、しかも友人たちの懇請に屈してやっと発表するという状況です。大学の講座につくためにジュネーヴに帰ってからは、ほとんど全く書くことを止めてしまいます。しかし彼は、決して研究を止めてしまったわけではありませんでした。彼に発表を思いとどませたのはいったい何であったの

6) フルルノワはまた、『インドから火星へ』の中でフロイトとブロイラーの『ヒステリー研究』を常に参照している。

でしょうか？ […] しかしこれは、何よりも思想のドラマでありました。ソシュールが彼の時代から離れていったのは、彼が少しずつ彼自身の真理を我がものとしていった、その度合いに応じていたのです。というのは、この真理は、当時ことばについて教えられていたことのすべてを否むことを彼に促すものであったからであります⁷⁾。

ソシュールが一般言語学に関する本の出版について、メイエ宛ての手紙のなかで熱意なく語っているのは、1894年のことである。結局は日の目を見ないままに終わる書物の草稿は、ホイットニー追悼文が1894年暮れに書き始められて遂には未完成に終わってしまうように、未整理の書類の束のなかに紛れこんでいってしまう。同じ1894年の手紙に、「書簡恐怖症」なるものをメイエに打ち明けているが、ペンを取ることが厭わしいと感じていたらしいソシュールの沈黙は、確かに一般言語学構築という沈鬱の時期と重なっている。

しかしこの時代をソシュールの完全な「無気力時代」と取ってしまうのは早計であろう。1894年に限って言うとしても、この年の9月にジュネーヴ大学において第10回国際東洋学会議が開かれているが、会議開催のためにソシュールは実行委員として精力的に活動している。この国際会議は当時の高名な比較言語学者の集まる場所でもあり、ほぼ3年に1回、ヨーロッパの主要都市で開かれていた。「私自身は東洋学などしたことなどないのに」とメイエにばやきながらも⁸⁾、招聘大学に在籍する言語学者としてソシュールが中心的な役割を担ったことは疑いがない。ソシュールはまた「書いて」もいるが、多くは発表せずに終わる文章か、あるいは無記名の投稿文である。1894年の秋には、ホイットニーに対する追悼文を依頼され、長文のメモを残している⁹⁾。この年の暮れ、フランスではドレフュス事件が勃発するが、ソシュールは反ユダヤ主義系の新聞「自由言論」に無記名の投稿を考え、反ユダヤ的色彩の濃い内容の草稿を残している¹⁰⁾。またソシュールが研究を怠っていたわけではない。一般言語学についての思索を深めつつ、1896年に専任教授になる頃から、ゲルマン諸語の研究を進めている。また1897年の夏期講座では、「音節の理論」を披露しているが、速記録の出版は拒否している。いずれもパリ時代からの研究テーマであるが、高度な研究結果に達していたにも拘わらず、全く出版をしなかったのを、周囲は訝しく感じたことだろう。

7) Benveniste, 1966 [1963]. 邦訳 p. 40-41.

8) 同じ日付の手紙参照。

9) Ms. fr. 3951, N10.

10) Ms. fr. 3951, N10.

時間は少し遡るが、パリからジュネーヴに戻ってきてかなり早い時期に、フェルディナン・ド・ソシュールは、3歳年上の心理学教員テオドール・フルルノワと、ジュネーヴ大学で知りあっている。この時期の接触を示す資料は、フルルノワの著作『共鳴視現象について (*Des phénomènes de synopsis*)』(T. Flournoy, 1893)である。この資料は「共感覚 (synesthésie と呼ばれる)」の中でも特に「音に色彩を感じる感覚 (Audition colorée)」について、当時ジュネーヴ大学の医学生だったエドゥアール・クラパレド (フルルノワの従兄弟) がアンケートをとってまとめたものを、フルルノワが完成させ、出版したものである。ここには「卓越した言語学者X氏」の例がひかれ、X氏のコメントも丁寧に引用されている。このX氏が紛れもなくフェルディナン・ド・ソシュールであることは、周辺資料から明らかにされているが¹¹⁾、このアンケートの解答は驚くべきものだ。「卓越した言語学者」は、フランス語の母音を「見る」とき、色やマチエールを感じる、と証言しているからである。

このアンケートは1892年の5月から数ヶ月に渡って行われたが、出版の翌年、1894年の暮れには、フルルノワはすでに次の研究対象に興味を奪われていた。霊媒エレヌ・スミス嬢¹²⁾である。コレージュ・ド・ジュネーヴの教授であるオーギュスト・ルメートルに誘われて交霊会に参加したフルルノワは、エレヌの霊媒能力に感嘆する。エレヌには主導霊レオポルド¹³⁾が付いており、彼女の知らないことをフルルノワに教えたり、火星語の翻訳をしてみせたりするのである。このレオポルドをはじめとする様々な霊の言動を、フルルノワは「閾下の自我 (Moi subliminal)」と名付け、意識されない人格や能力が霊媒エレヌ嬢の夢遊状態に現れ出たと理解する。フルルノワとエレヌの出会いが引き起こす「火星サイクル」と「インド・サイクル」の二つの幻に関しては、直接『インドから火星へ』を読むのが一番だろう。我々にとって重要なのは、1896年頃からフルルノワが複数の言語学者・インド学者にコンタクトを取り、エレヌの話すサンスクリットの調査を依頼していることだ。

11) Cf. Mifdillid Cifali, « Présentation », *Le bloc-note de la psychanalyse*, 3, 1983, p. 133-134.

12) 本名をカトリーヌ・エリーズ・ミュラー (Catherine Elise Müller) といい、当時ジュネーヴで販売員として働く30代前半の独身女性であった。平民階級の出で、学業を続けたわけでもなかったが、父親がハンガリー人で非常に語学の才があったことをフルルノワは強調している。

13) レオポルド自身の言葉によると、彼の別名 (そして真の姿) はカリオストロ伯爵。アレクサンドル・デュマの小説の登場人物にもなった、有名な錬金術師 (そしていかさま師) である。エレヌの前世の姿である (と言われる) マリー・アントワネットを中心とする幻視のサイクルに出てくるだけでなく、エレヌを守護するために、他の夢のサイクルにも頻りに顔を出す霊であった。

そうした学者の一人がフェルディナン・ド・ソシュールであり、彼が最も敏感に反応を示している¹⁴⁾。10 通の手紙がその証拠である。そしてこの反応は、同時期にソシュールが「ことば一般」なるものと独りで格闘していたことを考えあわせるなら、奇妙で不可思議にも映る。疑似サンスクリットの、そして火星語の一体何が、これほどまでにソシュールを惹きつけたのだろう。次の節では、「書簡恐怖症」と自称したソシュールの、フルルノワ書簡の性格を検討してみよう。

書簡恐怖

この時期、自らのうちに閉じこもっていくように見えるソシュールの行動でひときわ目立つのは、メイエには「書簡恐怖症」と自らを形容しながら、フルルノワに宛てた長文の手紙の数々である。1896 年から 1901 年まで 10 通の手紙のなかで、ソシュールは熱心にスミス嬢の火星語やサンスクリットについて仮説を述べたり、添削を試みたりしている。この手紙の多くの部分を、フルルノワは『インドから火星へ』の中で引用することになるのだが、ソシュールはそれが出版されることになるとは校正刷りの段階まで思っていなかったようである。著作の校正をフルルノワに頼まれた段階で、自分の書簡が多くのページを割いていることにソシュールは驚きつつも、結局は全ての引用を認め、そのうえ新しい仮説を付け加えようとしている。ここからも分かるように、この書簡はもともと公開を前提にはしていないが、フルルノワの要請に従って、学術的・科学的性格を持つべきものであった。

ソシュールの書簡には、有名なものが幾つかある。少年時代に敬愛する言語学者アドルフ・ピクテ宛に書いた「幾つかの印欧語の単語を少数の語根に還元する方法」。このとき若干 14 歳のソシュールはピクテから、少年の途方もない試みを優しく論し、さらなる語学の勉強を勧める返信を受け取っている。あるいはバリ時代にリトアニア語のアクセントについて、C. ヤウニウスに書いたラテン語の手紙。返信が来ないのを心配して、ボドゥアン・ド・クルトネに「自分の手紙は真面目に受け取られなかったのではないか」と危惧を漏らしている。あるいは後年、アナグラム研究の果てに、ラテン語詩人パスコリに自らの「思いつき」の証明を求めた手紙。パスコリから返事が来ないのを理由にアナグラム研究は放棄される。ソシュールの幾つかの試みとその挫折は、「書簡」に結びついている、

14) ソシュールは実際 1897 年 6 月 20 日交霊会に出席し、エレースの火星語やサンスクリットを聞き取っている。

と言っても過言ではない。

これらは不幸にもソシュールが返事をもらえなかったり、その仮説を否定されたりした例であるが、もちろんフルルノワ宛書簡の場合は当初の事情が違う。ソシュールの書簡のほうで、フルルノワの要請に対しての返答の形をとっているからである。しかし宛先に思いが十分伝わらなかった手紙にも似て、フルルノワ宛手紙は、毎回様々な仮説をたてて執拗に異言の真相にせまろうとしている。例えばこんなふうに：

追伸：正しいか間違っているか分からないのですが、今や私はシヴルーカの文のなかに、ところどころにサンスクリットの断片を交えた、火星語に類似するものをみようとしています。

私の考え、というより印象を簡単に例示するために、「私はあなたをガナパティの名において祝福する」とシマディニが言おうとしていると仮定してください。[…]
(1897年6月19日¹⁵⁾)

[…] 校正8ページに引用されている孤立語は——あなたはそれらを正しく認めていません！——私の意見では、スミス嬢のサンスクリットの女神が最もうまく作りあげたものです。これまで知らなかった6つか7つの語を読んで、私はこれによい点数を付けました。私が特に評価するのは、以下の語です。[…](日付なし、おそらくは1899年春¹⁶⁾)

エレヌのサンスクリットが偽物であると証明するために、ソシュールは「ラテン語の模作」と呼んで自ら意味のない文章を作り出してすらいる。

インドの代わりに「古代ローマの」夢遊状態において、以下の語が発せられたと仮定してください。—— Meâte domina mea sonóre forinda inde deo inde síni godio deo primo nomine... obero mine... loca suave tibi ofisio et ogurio... et olo romano sua dinata perano die nono colo desimo... ridere pavére... nove... この奇妙な文章から引き出される観察は次の通りですが、この観察は、スミス嬢のインド語のテキストにもそのまま

15) O. Flournoy, 1986, p. 193.

16) *Op. cit.*, p. 197.

当てはまるものです。[…](日付なし、おそらく1899年¹⁷⁾)。

比較言語学者として、「エレーヌの話しているのは疑似サンスクリットだ」という結論を最初から出しつつ、ソシュールはなおも彼女の言語の分析を続けている。フルルノワが求めていた返答を与えてからも、スミス嬢の言語とサンスクリットの比較を止めないのはなぜなのか、という疑問が自然と湧いてくる。

考えられるのは、ソシュール自身がフルルノワの問いに正しく答えられたとっていない、という理由である。実際、エレーヌの異言の謎は、正しい解答のない問いである。見方を変えるなら、これらのソシュールの書簡の隠れた宛先は、エレーヌの無意識に宛てられていると解釈できる¹⁸⁾。彼女が創り出すサンスクリットは、偽物にしてはうまく出来すぎている——果たしていかなる「隠れた自我」の作業がそれを可能にしているのか？エレーヌ自身は、彼女の異言を「真のサンスクリット」としているのだから、この問いには答えようもなかっただろう。真の解答がないままに、様々な仮説をたてて、この「言語」の成り立ちを説明しようとしたのが、ソシュールの書簡の執拗な性格を作り出したと言えるかもしれない。

他方、ソシュールが自らの書簡を再び目にし、ある意味で受け取るのは、『インドから火星へ』の校正段階、そしてそれが出版されてからである。彼は自分の手紙がその中に収録されているのを見る。『インドから火星へ』が出版された後、インド学者ヴィクトール・アンリがそこから『火星のことば』を上梓するが、アンリもその手紙を見たうちの一人である。アンリの提出した解釈について、当初ソシュールはフルルノワに「まったくの妄想に身震いがします」と洩らしている¹⁹⁾。しかし程なくして、ソシュールは気づく。同じ妄想は自らの解釈にも巣くっており、それがアンリの解釈の元凶となっているということに。

アンリがあなたに書いているようなふざけたことを間接的に引き起こしたことで、私自身を責めるべきではないのかという思いに捉えられています。a-tyê-yâ「私はあなたを祝福する」に関する私の迷論は、妄想に近い憶測の性格を持っていますが、あな

17) T. Flournoy, 1900, p. 279.

18) フルルノワはエレーヌの主導霊レオポルドと手紙のやりとりをしているが、ソシュールも可能であればレオポルドとの文通を願ったかもしれない。

19) O. Flournoy, p. 210.

たがこの思いつきに多くの場所を割くのを見たことで、この優れた同業者をその気にさせたのではないかと。(1901年5月16日²⁰⁾)

妄想の元は、結局は自らのしたためた書簡の中にあったのではないかとソシュールが気づくところで、この一連の書簡は終わっている。自分に返ってくる自分の手紙——しかも妄想に彩られたそれ——は、「宛先人不明」で返ってきたのではなく、自分への「返事」である²¹⁾。

この体験はソシュールにとって愉快なものではなかつただろう。自らが熱心に練り上げた比較の理論が、実はたわいもない妄想に過ぎないと気づかされたのだから。フルルノワとの交流は続くものの、異言に関してぱったりと研究を止めてしまうのは、フルルノワからの要請がなくなったからでも、またエレーヌの無意識のことばが解明できたからでもない。自分の仮説を妄想と認めた時点で、異言研究には終止符を打つしかなかったのだ。異言を研究しながら、自らも異言めいた「ラテン語の模作」を作ってしまった時、そしてその模作という行動の意味に気づいたとき、ソシュールは改めて書簡の恐怖に捕らわれたのではなからうか。

しかし交霊会を通してソシュールたちは既に、より「不快な」体験をしてしまっている。それは「転移」「逆転移」の体験である。

火星と東洋のトポス

なぜ火星の住人が、エレーヌ・スミスと交信をとる相手でなくてはならなかったのか。この問いに答を与えてくれるのは、エレーヌではなく、彼女の時代である。月でも太陽でも木星でもなく、火星が交信先に選ばれたことには、強い理由がある。

『地球外生命論争』(1986)においてマイケル・クロウは、世紀の転換点に「火星狂」と呼べるようなブームの広まりが存在したことを詳述している。真面目な天文学者たちが、高価な望遠鏡や新しい科学理論を下敷きに、火星に住人が存在するか、火星の居住性は如何なるものかについて、激しい議論を戦わせていたのである。世界の複数性に関する議論は古代中世から存在するが、太陽系の星体についての知識が深められるにつれ、19世紀

20) O. Flournoy, p. 211

21) この「返事」から、ソシュールは目を背けたいと思ったのではなからうか。献本された『インドから火星へ』をすぐに人に貸してしまい、手元にはない、とフルルノワに打ち明けている。

後半には他の惑星の居住可能性は疑問視されていったようだ。しかし唯一火星に関しては例外で、この惑星に高度な文明が認められるという観測が、次々に証拠として提出されるようになった。このブームに火をつける立役者として名を挙げるべき著者は多数あるが、ここではフルルノワも引用しているジョバンニ・スキアパレリ、カミーユ・フラマリオン、パーシヴァル・ロウエルの三者に言及しておこう。

イタリア人スキアパレリは火星が地球に近づいた1877年に、火星に「広範囲の水路システム」を観測した。この観測はただちにヨーロッパ、そしてアメリカにおいて賛否両論を引き起こすが、スキアパレリ自身の天文学者としての名声も手伝って、大きな影響力を持つようになる。これに敏感に反応したのが、すでに地球外の惑星の居住性について肯定的な著作を多数出版していたフランスのフラマリオンである。空想文学の才を持っていたと思われるフラマリオンは、1860年代から世界の複数性、特に宇宙における知的生命体の存在に関する著作を矢継ぎ早に出版していたが、スキアパレリの観測を自説の証拠と考えたのである。ここに天体間の通信、というシャルル・クロたちの夢も加わる。フラマリオンは1891年に星との交信およびその反応の受信に関する手段を発見したものに、10万フランの賞金を出す、としているが、地球外の惑星のなかでも交信の可能性が最も高いと思われていたのは、月と火星であった。特に火星に関しては、火星の水路の模様を信号や文字と捉える見方や、火星表面に明るい点が見えた、という多くの報告から、火星人が何らかの交信を求めている可能性は大きいと考えられていた。1894年にまたもや火星が近づいたとき、運河に関する言説は倍増するが、なかでもアメリカ人パウエル の著作『火星』（1895）は、運河を構築する知的生命体の存在を示唆し、また人間とは大きく異なる身体的特徴を持つ火星人のイメージを作りだしたことで、大衆の好奇心に強く働きかけることになる。

このような火星熱の盛り上がりのなかで、霊媒嬢が地球外と交信を取ろうとしたとき、「火星」が選ばれたのも無理ないことだろう。実際にエレーヌの街、国際都市ジュネーヴにはイタリアやフランスの火星熱がほどなく伝わったはずで、またアメリカの研究動向などにも通じた人々がいただろう。当時のフィガロ紙上にも、フラマリオンが大衆向けに書いた火星の表面についての考察（1888）や、カラダッシュによる火星のカリカチュア（1896）が載せられ、火星人が存在するという想像は、一般大衆にも十分伝わっていたようである。フルルノワによれば、しばしば交霊会を開いていた夫人の家で、エレーヌは1892年に火星の居住性についての話題を聞いていたという証言がある。そこでは火星の運河も問題にされていた。

しかしエレーヌ自身が火星研究の動向に特別の興味を持っていたふしはない。彼女の火星に運河はなく、火星人は笠をかぶったオリエンタルな風貌の人間そのもので、植物の色彩や家屋の形状が多少珍奇であるとはいえ、その景色は地球のどこか（おそらくは東洋）にありそうな雰囲気である。エレーヌが多少なりとも火星研究に通じていたのであれば、彼女の幻には運河なり、不思議な光線なりが現れたはずである。フルルノワは後にエレーヌの火星の凡庸さを指摘し、別の惑星にはもっと違った生命体が住んでいるはずだと彼女に諭すが、その後によくエレーヌは、より奇妙な動物のいる「別の惑星」を夢見るようになる。このことから明らかなように、「火星」という選択は、エレーヌ自身が強く望んだものではなく、彼女以外の学識ゆたかな出席者によってもたらされたものと見てよい。おそらく火星人ととの交信は、交霊会の人びと、特にオーギュスト・ルメートル教授の秘やかな希望を叶えようとするものであった。最初に火星からのコンタクトが訪れた際に、交霊会の円卓に「ルメートルよ、お前があんなにも望んだことだ」と綴られるように、エレーヌは彼女の周りの満たされぬ思いや願いを感じ取り、共同幻想のような形で交信を始めている。ソシュールが交霊会に出席したときも、エレーヌは特別に火星語の“翻訳”を披露し、言語学者と出席者を喜ばせようとするのである。

一方で、東洋に関する夢はどうだろうか。エレーヌが少女時代から東洋に憧れと関心を抱いていたことはフルルノワが証言している。そしてこの「東洋趣味」の傾向は、彼女一人のものではない。特にフランスを中心とした19世紀ヨーロッパにおけるオリエンタリズムの興隆は、文学や絵画によって、あるいは輸出入される芸術品などによって、人びとに幻を抱かせる東洋を作りあげたのである。折しも1894年にジュネーヴで「国際東洋学会会議」が開かれたのは、象徴的な出来事ではあるまいか。その頃にエレーヌは東洋の夢を深め、サンスクリットの単語を話し、書くようになっていったのだから。その言語の謎を解くためにフルルノワによって意見を求められた東洋学者も、ソシュールだけではなかった。ソシュールとも知古のあったインド宗教学者ポール・オルトラマルや、オーギュスト・バルト（サンスクリット学者で碑文文芸アカデミー会員、極東フランス学会の創立メンバー）もまた、協力を求められていた。エレーヌの異言は、つねに東洋学者たちに注視されていたと言える。

エレーヌ・スミス嬢と彼女を取り囲む学者たちとの関係は、分析者と被分析者の一対一の関係ではなく、霊媒と交霊会の複数の出席者という形をとってはいるものの、そこにはフロイトが名付けたところの「転移」「逆転移」という現象が起こっている²²⁾。明らかに

22) エレーヌと、彼女を取り囲む学者たちとの間の「転移」現象に関しては、より詳細な分析が必要

エレヌは、他者の欲望を読み取り、それを自分の幻視の中に再現している。例えばエレヌの前世の一つが古代インドの姫君だと明らかにされるとき、そしてフルルノワの前世と交わっていると知られるとき、お伽話を繰り出す渦のなかに出席者達は自ら望んで巻き込まれているように見える。交霊会の記録から少し引用してみよう²³⁾——（交霊会にてスミス嬢と出席者たちの質疑応答）〔中略〕——幻はこのなかの誰かに関係ありますか？（出席者一人一人の名前が呼ばれ、フルルノワ氏のところで「はい」という返事がある）——マドモワゼルには男性が見えますか——はい——〔中略〕——フルルノワ氏の前世ですか？——はい——〔中略〕——マドモワゼルは先日の幻のなかの未亡人になっていますか？——はい——この未亡人は誰か知っている人の前世なのでしょうか？——はい——ここにいる人の？——（返事は不鮮明。円卓の上に「我慢なさい」と綴られる）フルルノワ氏：このインド人の未亡人は、今生きているのですか？——はい——それは私の妻ですか？——（返事なし）——私は祭司だったのですか？——いいえ——王子ですか？——（勢いよく）はい——。

ここでは、語られる幻も異言も誰が発しているのかのか分からないほどに、人物の境界線が曖昧になっている。サンスクリットを正しく写し取ろうと交霊会に出席するソシユールが、いつの間にか古代インドの登場人物にさせられてしまったり、最終的には自分もまた「異言」らしきものを作ってみたりするように、エレヌを取り巻く学者たちは、科学的であればあるとするほど、曖昧で非理性的な記録を残している。

火星の幻と東洋の幻は、交霊会の出席者とエレヌ自身をいずれも遠い夢の場所に連れていくが、その場所はほぼ重なっている。言ってみれば、火星と東洋は同じ場所——エレヌたちのいる場所から時間的にも空間的にも最も離れている対蹠点——に存在する。しかしそこは、エレヌやフルルノワ、ソシユールの分身たちが住んでいるという点で、最も近い場所にもなりえる。まさにそこは、彼ら自身の知らない場所——「無意識」の場所を指し示している。ソシユールの一般言語学に、この対蹠点は組み入れられたのだろうか²⁴⁾。

となろう。フロイトも認めているように、「転移」現象は「分析医／患者」の間にのみ起こるわけではなく、「教師／生徒」や「教導者／告解者」などの間にも起こりうる。エレヌの交霊会においては、この関係は複雑化していたと思われる。エレヌは周りの学者たちの「生徒」でもあり、また同時に彼らの「教導者」でもあったからである。

23) 1895年3月10日の交霊会の記録、オーギュスト・ルメートルの未公開資料（Cifali, 1983, p. 375-376）。

24) この点に関しては、別稿をたてて詳しく検討する必要があるだろう。

まとめに代えて—— « f » の不在

ソシュールは『インドから火星へ』の校正刷りが出来上がった頃に、改めてフルルノワに新しい観察を提示している。それによれば、エレーヌのサンスクリットには « f » が欠けている。

[...] ラテン語のことを話すのは止めて、スミス嬢のサンスクリットに戻しましょう。このサンスクリットは決して子音の *f* を含みません。これは消極的とはいえ重要なことです。 *f* は実のところサンスクリットには無縁です。ところが、もしこの事実を知らされていなければ、この子音は他の子音と同じように正当なものに見える訳ですから、自由な発想では、非常に高い確率で、 *f* をもったサンスクリットをこしらえると思うのです。[...] (日付なし、おそらく 1899 年²⁵⁾)。

また別のところで、ソシュールは次のようにも述べている。

シヴルーカの状態にあるときに、彼女の頭にある唯一のことは、フランス語の語を発話しないこと、というより発音しないこと、です。しかしそれでも、彼女が言おうとしていることのテーマあるいは基盤は、フランス語の語であるわけです。そして彼女の心が従っている法則は、これらの親しみのある語がそれぞれ、エキゾチックな様をみせる代理語に取って代わる、というものです。どのようにかは重要ではありません。[...] (1897 年 6 月 19 日²⁶⁾)

このソシュールの観察が出版されてから一年後、前述のサンスクリット学者ヴィクトール・アンリは極めてシンプルかつ説得力のある解釈を引き出している：

人から嘲笑されようと、私は単刀直入に言いたい。夢の論理は目覚めていて意識のある人のそれとは全く違う。しかも健康で沈着な人の最も単純な夢想が、私がここで推測していることよりもっと奇妙な思考の連合をもたらすことも時によってある。ス

25) Flournoy, 1900, p. 280. 強調はソシュール。

26) O. Flournoy, 1986, p. 193.

ミス嬢が疑似サンスクリットや火星語の音を集めているときに、彼女の潜在意識いっぱいに占める一般的思考というものがあるとすれば、それはもちろん「フランス語」を話さないということだ。彼女の注意はすべてこのために向けられている。ところで、「フランス語」という語はfで始まる。この理由から、fは彼女にはまさしく「フランス語的な」文字と映っているのである。従って彼女はできるかぎりこれを避ける。それゆえに疑似サンスクリットにはfは全く無く、火星語にもほとんどない²⁷⁾。

『火星のことは』でアンリはソシュールの観察を一步進め、無意識の論理というべきものが、エレーヌの異言のなかに現れているのではないかと問うている。そしてそのような論理は、サンスクリットにおけるfの不在を知っていようと知らないでいようと、フランス語のfを極力避けるという方向に向かうのではないかと解釈するのである。一方、ソシュールが非常に近いところにながらこの解釈にたどり着いていないのは、エレーヌが「サンスクリットにはfの音がない」と知[・]っ[・]ていたのではないかとソシュール自身が疑っているからだ。つまりソシュールは、エレーヌが意識的にサンスクリットを作りあげている可能性を捨ててはいないのである。«f»の不在に関するアンリの解釈とソシュールの解釈を対峙させることで、我々は僅かながらソシュールが「夢の論理」に対して拒否反応を示していたのを見ることができる。

本稿の性格上、ここでは同じ時期に練り上げられていたソシュールの一般言語学と、「無意識」概念との関係について、詳しい検討に入ることはしない。しかしソシュールが「無意識」という概念に対して抵抗を感じつつも、それが我々の意識と隣り合わせにあるものと気づいていることは確かである。ここで一般言語学について残されたメモの一節を思い出してみる必要がある。「言語学者でしかない言語学者は、事実を分類することができると私が思う道筋を見つけるのは不可能である。徐々に心理学が我々の科学を實際担っていく、なぜなら心理学は言語がその分枝の一つではなく、心理学自体の活動のABCであることに気づくからである²⁸⁾」。法則に支配された、理性的な言語とその学問を目指しつつ、ソシュールはそうした言語と人間の心理探求が切り離せないものであると確信している。

ソシュールが「無意識」概念に見せる抵抗は、ソシュール研究がフルルノワ関連資料に感じる居心地の悪さと重なっている。ソシュールを現代言語学の祖と見なし、その思想の

27) Henry, 1901, p. 23.

28) Saussure, 2002, p. 109.

源泉を探ろうとする研究者にとって、ソシュールがいわゆるオカルティズムに関わっていたという事実は躓きの石である。精神分析の歴史を辿るソシュールの息子レイモン・ド・ソシュールとレオン・シェルトークが語るように、精神分析の誕生の研究がある時期まで進まなかったのは、19世紀末という時期が動物磁気術と催眠術の隆盛期にあたり、その二つが精神分析界では抵抗を呼ぶテーマであるからであった。言語学の歴史を見る時にも同じことが言える。19世紀終盤に降霊術が流行り、いたるところで交霊会が開かれていたとはいえ、近代言語学の基礎を築いたソシュールがそれに参加し、さらには非理性的な異言研究に携わっていた事実を直視するのは、「真面目な」言語学者たちには苦痛に近いことかもしれない。実際ソシュールは真剣ととれる態度でエレーヌの「火星語」と「サンスクリット」に取り組み、その謎を解こうと自ら「偽ラテン語」を作り出してさえいるのだから。言語学から無意識の問題を排除しようとする姿勢は、このソシュールの異言研究から目を背けざるを得ない。

ソシュール自身もまた、自分自身の無意識と向き合ったときに、異言研究から遠ざかる。この問題が彼のなかで再び蘇るのは、ギリシャ・ラテン語の詩のなかにアナグラム形で固有名詞を聴き取った時ではないだろうか。その時には、エレーヌという魅力的な導き手はおらず、ソシュールは独り一般言語学の拓がる地平の縁に立ち、無意識の深淵を眺め入ることになる。

参考・引用文献表

- Émile Benveniste, 1966[1963], « Saussure après un demi-siècle » (conférence donnée à Genève en 1963), repris dans *Problèmes de linguistique générale*, 1, Paris, Gallimard, p. 32-45. [邦訳:『一般言語学の諸問題』(岸本道夫監訳) みすず書房, 1983年]
- Josef Breuer und Sigmund Freud, 1895, *Studien über Hysterie*, Leipzig, Franz Deuticke. [シグムント・フロイト『フロイト著作集7・ヒステリー研究』(懸田克躬・小此木啓吾訳) 人文書院, 1974年]
- Léon Chertok et Raymond de Saussure, 1973, *Naissance du psychanalyste : de Mesmer à Freud*, Paris, Payot. [レオン・シェルトーク, レイモン・ド・ソシュール著『精神分析学の誕生: メスメルからフロイトへ』(長井真理訳) 岩波書店, 1987年]
- Mireille Cifali, 1983, « Les chiffres de l'intime », dans T. Flournoy, 1983, p. 371-385.
- Michel J. Crow, 1986, *The Extraterrestrial Life Debate 1975-1900*, Cambridge, Cambridge University Press. [マイケル・J・クロウ『地球外生命論争 1750-1900』(鼓澄治・山本啓二・吉田修訳) 工作舎, 2001年]
- Olivier Flournoy, 1986, *Théodore et Léopold*, Neuchâtel, Éditions de la Baconnière.
- Théodore Flournoy, 1893, *Des phénomènes de synopsie*, Paris, Félix Alcan.
- , 1983 [première parution ; 1900], *Des Indes à la planète Mars*, Paris, Seuil.

Victor Henry, 1901, *Le langage martien*, Paris, Maisonneuve.

Michael Lynn-George, 2006, « The Crossroads of Truth : Ferdinand de Saussure and the Dreyfus Affair », *MLN*, 121, 2006, p. 961-988.

Saussure, Ferdinand de, 1964, « Lettres de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet », *CFS*, 21, 93-125.

—, 1978, « Essai pour réduire les mots du grec, du latin & de l'allemand à un petit nombre de racines », *CFS*, 32, 73-101.

Marina Yaguello, 1983, « Psychanalyse et linguistique : première rencontre », dans T. Flournoy, 1983, p. 365-370.